

2023年10月1日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「私たち教会の主の晩餐」

聖書：コリントの信徒への手紙一 11：17～26

「主の晩餐」は、イエス・キリストの十字架と復活の出来事を想起することだとパウロは言う。また、イエスの「十字架」「死」は、私たちに《多くの実を結ぶ》（ヨハネ 12：24）ためであり、《わたしたちが生きようになるため》（ヨハネ 4：9,10）のものであると聖書は記す。

このイエスによる最後の晩餐の時に共に食事をしたのは、弟子たちであった。弟子たちはこの後、イエスを裏切り、イエスを置いて逃げ去ることをご存知でありながら、イエスは弟子たちと食事を共にする。そして復活後も逃げ去る弟子たちに現れ食事を共にする。この「主の晩餐」には、そういう弟子たちの裏切りも伴いながら、されど弟子たちと共に食事をなさる主イエスがおられる。

主の晩餐式は月に一度巡って来る。私たちが感謝に満ち溢れている時だけ巡ってくる訳ではない。試練の真っ只中にいる時、自分の罪深さをいやというほど思い知らされている時にも、主の晩餐式は巡って来ることもあろう。そんな時、「こんな私がパンを取っていいのだろうか、杯を飲んでいいのだろうか」と思うことがないか。主の晩餐は、決して私たちの側が気持ちで取る、取らないではない。主の定めで主イエスの側から《これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい》と言われ、「さあ、取って食べなさい」「あなたが今、私を裏切ることを知っている」「あなたが神を見失っていることを知っている」それでも主は、「さあ、取って食べなさい」と言う。そこに気づかされる時、「主の晩餐式」は、私たちの側に悔い改めを起こし、感謝と慰めに満ち、希望と勇気が与えられて行くのではないか。

バプテスト教会では「私たち教会の主の晩餐」としての在り方が大事になる。主に二つの在り方があるが、バプテスマ（洗礼／信仰告白）を受けた方のみで配餐（はいさん）に与る在り方。もう一つはバプテスマ（洗礼）の有無に関係なく、配餐に与ることが出来るとする在り方。この二つは、どちらが良い、悪いではない。私たちの教会がどちらの在り方を選んだのかということが大事になる。前者の「主の晩餐式」は、イエス・キリストの御業に対する「こちらからの信仰告白のわざ」「決意と応答のわざ」ということになる。後者は「イエス・キリストの無条件の招き」「十字架で示されたキリストの普遍的な救いの御業」を大事にしている教会。どちらであっても大事なことは、バプテスト教会として、みんなで学び合い、理解し、「私たち教会の主の晩餐」として選んで取っていくということにある。そういう意味では常に学び合うことにおいて「私たちの教会」は生きた教会となる。（神谷）